別府大学
NOV.21.1984
図書館

佐伯史談

第九十三号

「郷土史研究」誌
通算第百十五号

昭和四十九年三月十三日

佐伯史談会
事務所 佐伯市大字稲垣 龍護寺 羽柴方

随想

宋襄の仁

―中国の史書に学ぶ―

佐伯史談会
会長 高木嘉吉

御存知の方もあろうと思うが、標記のことは中国の春秋の世、紀元前六三八年に、黄河の中流の泓河のほとりで起ったことである。

当時は統一国家としての周の威令が行われなくなって、諸侯が乱立して争覇を事としていた。その中で楚は南方の大国、宋は中原の小国であった。楚の成王は近隣の諸侯を征服して、中原への進出を志して、宋の襄公と衝突した。両軍は泓河の両岸に布陣して戦いをはじめた。国の大小を反映して、楚軍は強大、宋軍は弱小であった。楚の大軍の半分がやっと泓河を渡ったとき、宋の軍師は、

「敵は多く、味方は少ない。まだ渡り終らないこの機会に、襲撃しなくてはいけない。」

と進言した。しかし襄公は

「それはよくない。君子は人の厄につけこまないという。自分は小国の主であるがそん方仕業はできない。」

といってきかない。

そのうちに楚の軍は河を渡りおわったが、まだ軍列がととのわない。軍師は

「敵陣のととのわない今のうちに撃へべきである。」

とすすめたが、襄公は

「君子は敵が陣をなさないうちに鼓をうって攻めかかることはしない。」

といって聞き入れない。そして楚が軍列をととのえてから、正々堂々と戦をはじめたので、もちろん衆寡敵せず、宋軍は惨敗をきっした。

此の時にうけた戦

本号の内容

随想 宋襄の仁（高木嘉吉）……一
解説 熊本藩長岩荷佐一先生(四)（羽柴 弘）……三
解説 佐伯城絵図解説(1)（小野英治）……七
明治四年佐伯県の沿革
小言 龍護寺について（羽柴 弘）……八
研究 佐伯方言集話（山内武麟）……九
資料 横川先生と佐伯(1)（山本 保）……一五
研究 寺の四季（富沢 巌）……一八
福泉寺年中行事
研究 中年の郷の大流（安部孫吉之門）……二一
紀行 蜘野浦を歩いて（高木嘉吉）……二六
源六宗に土器を拾う（羽柴 弘）……二六
本年度郷土事業計画・其他……三

傷のため、七か月後に襄公はついに世を去った。

以上が史書が伝える「宋襄の仁」の大要である。孔子は紀元前五二二年に生まれ、紀元前四七九年に没しているが、その編さんした「春秋」にこの話が記されている。この襄公の泓河の戦については、当時種々の批評があった。賛成派は、襄公が敵が列をなさない前に戦いをしかけなかったことを特別大書して、

「七事にのぞんで大礼を忘れないのは、聖人の周の文王の戦いもかくやと思わせる。まことに立派なものだ。」

と、極力推賞している。

しかし、これについても反論もある。

「襄公は戦争とはどういうものかご存じでない。敵が険阻に苦しんで列をなさないのは、まさに天のあたえる好機である。まして相手は大敵ではないか。戦争はたがいに殺しあいをするものだ。もし礼にそむき、残酷なことをするのが悪いというのなら、はじめから戦争をしなければよい。」

と反駁している。

読者の皆さんにも賛否両論があることと思うが、戦乱の世の中に礼儀を守るものとして襄公をほめた論者は、儒者の歴史観として正統のものであろう。「宋襄の仁」といって、後世では馬鹿正直の見本のようにいうが、儒者がこれを周の文王もおよばぬとほめたところは、なかなか面白い。

「宋襄の仁」について色々学びとるのは、「温故知新」の一端である。沿々として我利に走る今日、何人かの襄公が馬鹿正直を実行に移したら、世の中はもっと明るく、おおらかになることは確かである。

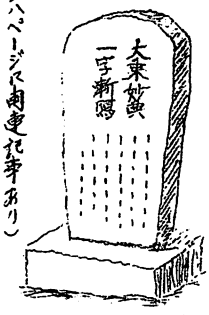
年表をくってみると、泓河の戦は孔子の生年より百五十九年前である。襄王の言動をみると、儒教の精神がよく体得されているようである。これはどうしてであろうか。孔子の教（儒教）は、紀元前十二世紀中葉の周の始祖文王、武王、周公旦の教えを祖述したものである。

右三公のことは、詩経・書経に記述されているので、襄公もこれによって儒教の大本に通じていたのであろう。中国は太古から文字・文章の発達した国であり、治者の資格の第一として、徳望と教養が要求されたので、襄公もそうした資格を備えていたものと思われる。

私はこれを書くのに誤りなきを期するため、手許の史書をめくった。というよりも、小説を得て読んでいる史書の中から、この材料を拾った、という方が当っている。史書を読むとき、著者の史観に注意することが大切である。史観の相異によって、史書の体裁がちがってくるからである。「春秋」も孔子の弟子によって注釈され、公羊伝、穀梁伝、左氏伝の三伝が出来たが、かなりニュアンスを異にしている。「春秋」の研究は、三伝を併せ読まなければいけないとされているが、それは専門家の領域で、素人には手のとどかないところである。

「宋襄の仁」が脱線してしまったが、要は史書に親しみ、史蹟を訪ねて、同好の士と共に「温故知新」の旅をつづけたいと念ずるのみである。

（おわり）



直川村小下樹林中の古墓

（碑銘の中に）

一空常実仏士
七母理陽如智信女

宝永元歳次甲申
冬十一月念七日寞

水正山瀬戸禅寺
住持小坂仁愛宗恕謹誌

（一休石会員発見）

（二八ページに関連記事あり）